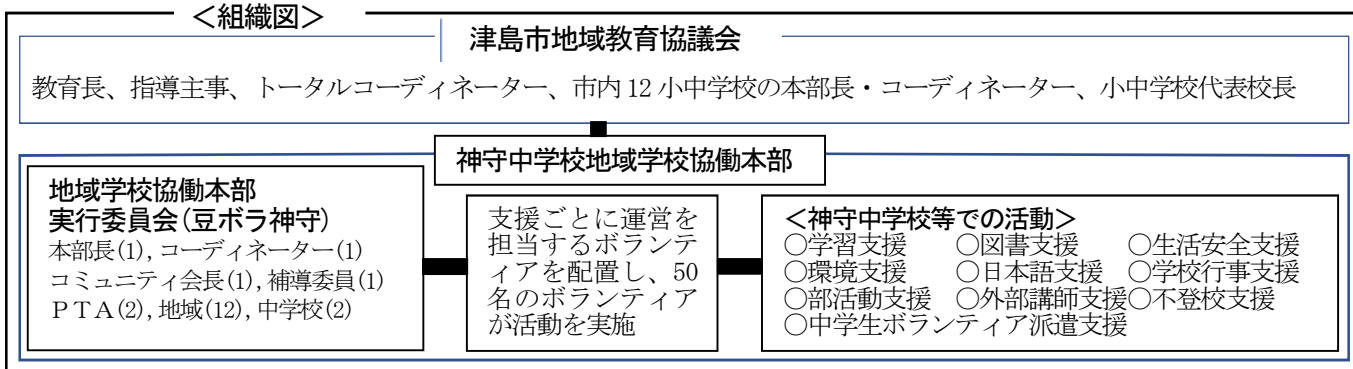


「地域学校協働活動における地域コーディネーターの実際」(津島市)

神守中学校地域学校協働本部(豆ボラ神守)

1 取組の目的・経緯 学校の荒れを解消し、教育課題(非行・不登校・学力等)克服のために、学校を名実ともに地域に開き、保護者以外の地域住民の協力を得るため、平成22年10月に文科省の委託事業である学校支援地域本部(豆ボラ神守)として発足した。平成28年7月から「学校支援地域本部」を「地域学校協働本部」とし、学校・家庭・地域が一体となって、地域ぐるみで子どもを育てる体制を目指している。



2 事務局の設置 地域住民が日常的に直接生徒と関わることができるよう、また、学校と地域のスムーズな連携やボランティア相互の交流の場となるよう、稼働率が低く、外部からも入退室しやすい部屋(調理準備室)を、本部事務局とした。



＜事務局の状況＞

- ・外部出入り口のカギ貸与(コーディネーター管理)
- ・365日24時間利用可能
- ・備品(パソコン、コピー機、携帯電話、水回り、冷蔵庫等)

3 主な取組の概要(平成22年度～現在)

●**事業推進での目的** 「地域学校協働活動」では、これまで地域から学校への一方向の支援活動であった「学校支援地域本部活動」を、組織的には、地域の諸団体との緩やかなネットワークを形成し、「支援」から「連携・協働」への発展を目的にしている。また、「個別」の活動を「総合化・ネットワーク化」し、コーディネート機能を生かしながら、多様で継続的な活動を通して、「学校とともにある地域づくり」を目指している。

●**豆ボラ神守が重要視する「ナナメの関係」「つなぐ」「循環・持続・協働・自立」「コミュニティ・ラーニング」**

東京都初の民間人校長であった藤原和博氏が提唱する「ナナメの関係(利害関係のない第三者の関係)」を活動のすべてで取り込み、コーディネーターを始め協働本部のメンバーは、そのための「つなぐ」役目を担っている。大学生ボランティアや退職教職員、地域のおじさん・おばさんなどが、生徒の悩みに寄り添い、ストレスを和らげ、本音トークで子どもたちを包み込んでくれる関係を重視している。非行、不登校、いじめ、思春期の友人関係での悩み、学びのつまずきなど、子どもたちの良き相談者やアドバイザーとなることを大事にしている。また、次代を担う町の人材育成のために、中学生ボランティア活動(コミュニティ・ラーニング)を持続し、「してもらう(take)」から「させていただく(give)」への循環をつくることで、自立した協働のまちの実現を目指している。

●**学習支援 寺子屋(月テラ・ドテラ)の実施** 高校進学を控えた3年生の困り感に寄り添い、学習に困難を抱えている生徒や不登校で学習機会がない生徒への支援の場として、土曜日の午前(ドテラ)に、大学生のボランティア、退職教員を支援者として、平成22年度より10月～3月に20～25回の学習支援を実施している。

また、平成23年度より、対象を1,2,3年生にも広げるために、部活動のない月曜日の放課後(月テラ)に、退職教員を中心に、学習支援を行っている。自学自習の形態の中で、生徒同士が教え合ったり、学ボラさんに気軽に質問したりしながら、学ぶことの楽しさや学習習慣の確立を目指している。10～20名の参加があり、10月～2月末までの10回で、15:00～17:00の2時間を図書室で実施している。

＜成果・効果＞

- ・個別指導で成績がアップし、志望校合格に
- ・大人しい生徒が積極的になり、希望大学生を逆指名するほどに
- ・思春期の悩み相談にも学ボラのアドバイスで、心の安定につながり、受験の面接・作文指導も大学生から受け、コツを伝授され、自信と励みに
- ・外国人生徒への日本語及び受験勉強も指導する場に（定時制へ合格）
- ・保護者からは、我が子が目標を持ち始め学習に意欲的になり、喜びの声が寄せられ、弟が3年生になったときに、ドテラにも参加することに
- ・生徒は大学生に会えるのを楽しみに、塾よりもわかりやすいし、年齢が近く聞きやすいとの声
- ・個人ファイルを学習状況の報告や保護者との情報交換に活用し、保護者の期待も大きくなる
- ・教員志望の大学生がほとんどで、大学間交流が刺激になり、教採学習会を自主的に開催したり、情報共有の場や励みになったりしている
- ・学習スタッフも、問題を共に解く姿にやりがいを感じ、ボランティアさんへのおもてなしに力が入り、元気の源に
- ・2次障害を起こしていた発達障害（アスペルガー）の生徒のドテラでのVTRを見て、教師も授業時の表情との違いに感心
- ・不登校の生徒も、分かる喜びで生き生きとした姿に



● 図書支援（図書ボラ）平成 23 年度から、学校で朝読書を実施する上で、図書室の環境・運営上の課題を「図書ボラ」の支援により解決を図った。それまでの図書室は、旧字の書物ばかりで、暗くかび臭く、週3日の昼休みのみの開館で使用頻度が低かった。読書が好きな生徒も非常に少なかったため、借りやすく明るく毎日来たくなり、地域の大人との会話もできるホッとできる場所にと図書室改造を進めた。地域から図書ボランティアを募集して、閉館していた火・木曜日にも開館して、直接カウンターでの受付業務を、8年間継続している。23年度には、全蔵書のバーコード化を延べ2か月かけて行い、マンガ本や時流の書物を積極的に購入して、掲示物の工夫や飾りつけなどで、生徒の読書活動を推進している。

＜成果・効果＞

- ・朝の読書ができるようになって、落ち着いた静かな1日のスタートに
- ・読書量（貸し出し冊数）が年間2400冊になり、読書好きも全国並みに
- ・遅刻者数が激減する
- ・昼の休み時間の図書室は、多い日で100名が利用
- ・クラスで孤立し、友達のいない生徒は、ホッとできる居場所に
- ・図書ボランティアスタッフは 生徒との会話や活動の励みに
- ・書架は、地元の大工・建築士の方が材料費だけで6本製作していただく



● 中学生のボランティア活動（学校から地域へ）20年後の地域住民のボランティア・スピリッツを醸成するために、中学生による地域貢献活動（コミュニティ・サービス）を活動に組み入れている。次の震災に備え、地域の防災・減災の担い手育成という意味においても重要な取組としている。

校区の3小学校にある「各地域コミュニティ」と連携・協働し、地域行事や防災訓練等に、積極的に中学生のボランティアを派遣する活動を推進している。

コミュニティ関係者による行事の説明会や役割分担を事前に参加中学生に指導していただき、前日準備として集会用テントの設営や会場準備なども行っている。ボランティア依頼は、校内にある専用掲示板に、直接氏名を書き込む形式で、朝のショートタイムで全校生徒に伝えると、ほぼその日に50名以上の参加要請人数が埋まるほど、生徒の関心や意欲が高い。毎回、地域からは、中学生の活躍に好感度と感謝の声ばかりで、参加した中学生も、来年も是非行きたいとの感想がほとんどである。年間10回ほどの依頼があり、中学生がなくてはならない存在となってきた。また、技術・家庭科の保育の授業にも、例年園児が中学校を訪問して交流している。そのお礼も兼ねて、保育園の行事の準備や当日の運営にも、中学生がボランティアに出かけている。

「小中高時代の地域活動への参加率が高い子どもは、大人になってからのボランティアへの参加率も高い」というデータがある。次代の地域の核となる人材になればと、今後もコミュニティ・ラーニングを継続していきたい。

＜成果・効果＞

- ・人生の空白年代(中学生)が町の一員として活躍
- ・地域の交流を通して中学生の存在を身近に感じ、好印象に
- ・高齢者が多くなり、力仕事の準備に非常に助かったとの声が多く、中学生が行事に欠かすことのできない存在に
- ・中学生の一生懸命で積極的な姿や笑顔に、スタッフの皆さんも癒され、地域の将来に明るさと大きな財産になる
- ・地域を知らなかった中学生が、地域の人の大きさを再認識



●**生活安全支援** 生活安全ボランティアと津島少年補導委員（校区5名）と津島警察署少年係が協働し、毎月1回、清掃時から昼休みと5限開始までの時間帯に、生徒への声かけや注意・賞賛など、自己紹介しながら、生徒と顔見知りの関係になる活動をしている。これにより地域でも声かけがしやすい良好な関係づくりをして、非行の抑止力になればと継続活動を実施している。定期的に校内巡視をすることで、学校の教員・生徒の変化に気づき、地域と連携した生徒指導に役立っている。また、活動後には、気付きを学校へ伝えたり、地域での生徒の様子情報が学校にも入る。年に1～2回は、給食をとりながら、「**風と土の会**（先生と地域の交流会）」を実施し、いじめや不登校などの生徒指導上の諸問題の情報交換も行っており、豆ボラは、生徒だけでなく、教師も支える役目を担っている。

＜成果・効果＞

- ・あいさつの声が全校的に、日常的に、自然にできるようになった
- ＊地域から支援をいただいている感謝の心とおもてなしの心が出てきた
- ＊地域の方からのお褒めの連絡が多くなった
- ・遅刻者・早退者・欠席者の激減、非行・不登校生徒数も激減した
- ＊トイレ改修、朝読書、学びの共同体の授業の相乗効果で
- ・生徒指導情報の共有により、家庭教育支援にも発展した
- ・私立中学への進学も激減した（安心して通わせられる学校に）
- ・地域での生徒の愚行は、地域で指導後の報告としての連絡が多くなった



●**環境支援** 「学校はトイレから荒れ始める」、「生理的欲求が満たされずして、学習（自己実現の欲求）は成り立たない<マズローの5段階欲求説>」、「環境は人をつくる」を生徒指導の基本に据え、豆ボラの最初の活動として、暗く汚く老朽化したトイレ掃除から始まった。生徒の中には、学校のトイレを使いたくないという理由で、早退する生徒が存在した。この活動により、行政による校内のトイレ改修工事につながり、ひいては市内全小中学校のトイレ改修工事に発展した。地域の力でトイレがきれいになったことで、生徒も清潔を保ち、地域への感謝の気持ちが育った。「地域が学校を変える」そのものの力を生徒も保護者も教員も実感した活動となり、豆ボラの存在の大きさが認識されることになった。平成23～25年度にかけ、荒んだ校内環境を少しでも潤いのある学校にと、これまでPTAで実施していた春秋の花植え作業を豆ボラも協働して活動を進める一方、全校生徒からの環境改善ニーズを集約し、校内の芝生化に取り組んだ。「愛知県森と緑づくり事業」に手を挙げ、ボランティアによる芝生の植栽活動を実施した。2日間で延べ500名以上の生徒・保護者・教職員・豆ボラ・地域による事業となった。23年度には地域の高齢夫妻から毎年100万円の寄付があり、中庭のレイアウト案を全校生徒から募集し、環境支援ボランティアである庭師の助言も取り入れて、生徒・教職員・PTA・豆ボラで改修に取り組んだ。芝生の維持管理も豆ボラで行っている。

＜成果・効果＞

- ・生徒のニーズが地域の力で現実の形に
- ＊人・もの・金・情報が学校に投入
- ・生徒の心に潤いと、母校愛・地域愛につながった
- ＊自分たちも参画し、自慢と誇りと校内美化意識が育った
- ・芝生化で憩いの場所に（お弁当や談笑の場に）
- ・芝生化が部活動の活動場所に
- ＊上位大会の芝生コート感触に備える（野球サッカーテニス）
- ・あの時、芝生を植えた園児も、中学入学の期待に



● **学校行事支援<キャリア教育>**

平成25年度より毎年、大学生等ボランティアと生徒（2年生）のしゃべり場を実施している。高校進学を控え、受験や面接、高校・大学生活、アルバイト、就職など、多岐にわたる生徒の疑問に応え、少しでも将来への不安や悩みを解消し、目標に向かって頑張ってもらいたいという目的で実施している。多くの卒業生をはじめ、豆ボラを介して有給休暇をとってまできてくれるボランティアにとって、次の世代へのメッセージの場でもある。先輩の多くの失敗談を耳にしたり、年齢が近く話しやすいため、多くの生徒の進路目標への意欲化と学びの場となっている。まさしく生きる力を身に着けるアクティブ・ラーニングは、豆ボラ（地域学校協働本部）の存在があつてこそ実現した取り組みである。

＜成果・効果＞

- ・生徒の事後感想から、受験の分からないことや不安が減った。
- ・先輩の生き方を学び、2年生から3年生に向けての学習に頑張ろうと思った。
- ・将来、就きたい職業についても助言を受け、これからすべきことがはっきりした、と前向きな感想が多かった。



●不登校支援<親の会 (Be~Heart) の開催>

最重要教育課題である不登校対策として、元不登校だった中学生の母親が現不登校生徒の家族にピアカウンセリングの手法でアドバイスするなど、同じ悩みをもつ保護者への支援を平成24年度から月1回、スクールカウンセラーも交えながら実施した。個人情報保護の観点から不登校支援ボランティアに誓約書を書いてもらい、安心して相談ができる体制を整えた。相談者は、様々な体験談から家族の支援の在り方を徐々に実践し、生徒の心の安定が図られるようになった。また、不登校体験から高校進学した卒業生が直接、現不登校生徒の家庭訪問をして、生徒の悩みや困り感に寄り添い、進学への後押しをするケースもみられた。参加者は、少しずつ元気を取り戻し、不登校に対する見方や考え方が改善されていく支援になった。本来、不登校がなく、このような支援の必要がないことが目的であり、1年半の活動後、現在は休止している。



<成果・効果>

- ・会を重ねるごとに、相談者の心の安定の変化が参加者にも分かり、支援の重要性を意識できた
- ・親の会の場面だけでなく、地域でも気にかけて相談者への支援の広がりが見られた
- ・不登校生徒に対して、同じ経験をした卒業生からの支援にも広がり、会の存在の大きさを実感した
- ・不登校の専門家であるスクールカウンセラーの指導助言は、会の運営に必要な不可欠な存在だった

●地域学校協働本部の具体的な活動

- 1 学校教育課程内・・・学校長や教員の求めに応じた地域人材による支援活動（授業支援・学校行事支援）
- 2 学校教育課程外・・・地域人材による学校教育活動外の連携活動（土曜学習・放課後子ども教室・地域未来塾等）
- 3 学校教育活動外提案活動・・・地域性を生かした地域の企画による協働活動（まちづくり・地域活動等）

コーディネーターの心構え

- ・地域学校協働本部の目的と役割にブレがないように心がける
- ・学校のニーズや思いを、日常的に十分傾聴し、ズレのないボラ活動へ導く
- ・国・県レベルのボランティア養成講座や交流会を通じて、モチベーションアップと情報収集に努める
- ・各分野のボランティアが活動しやすいように、学校とボランティアのニーズを分かりやすく繋げる
- ・ボランティアの不安を払拭するおもてなしの心での対応に心がける（交流と情報交換の場）
- ・幅広い人脈の拡充とつながり力を常に意識する
- ・ボランティアは、学校（先生）が本当に感謝しているか、直ぐに分かるもの → 心からの感謝を
* 「ご苦労様です」ではなく「ありがとうございます」の言葉がけをボランティアに
- ・直ぐに子どもたちの変化は表れないが、地道に継続すると必ず表れる。
（創設から6年でようやく学校が変わり、先生方の反応も変わってきた）
- ・ボランティアを通じて、地域での出会い、様々な人との知り合いが増える
- ・生徒の笑顔や「あっ！おばさん！」と声をかけてもらえることがコーディネーターの喜び

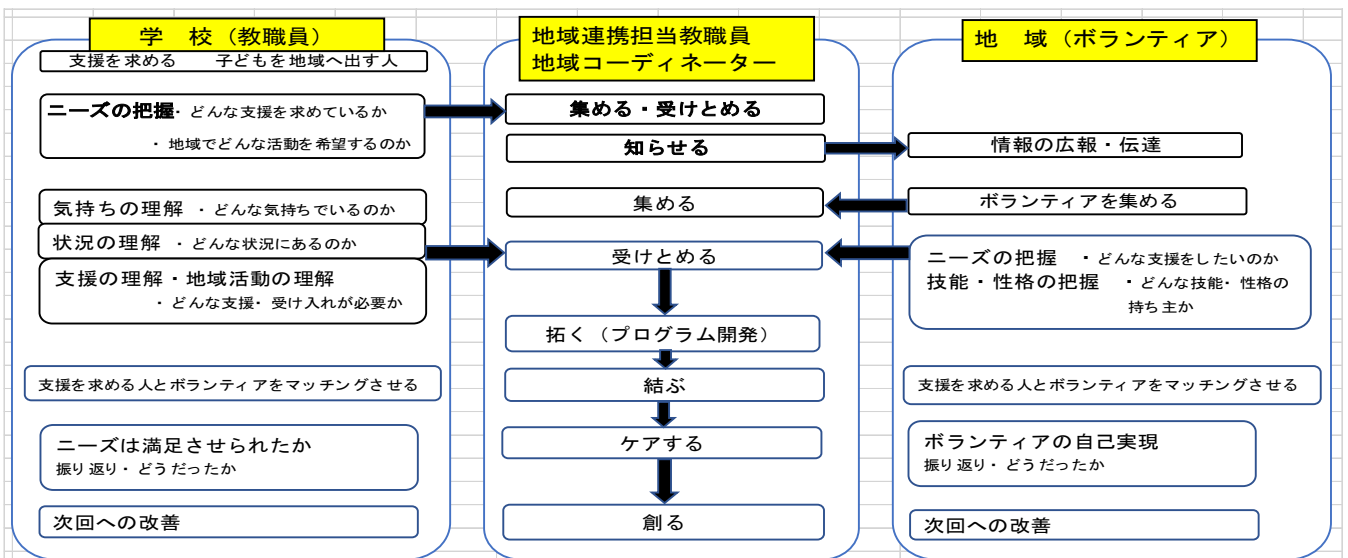
ボランティアの便利遣いは厳禁

●地域コーディネーターの機能（3つの機能と役割）

- 1 ネットワークづくり・・・地域資源の発掘と地域ネットワークの構築・維持
- 2 学校ニーズ支援・・・学校と地域の交流連携が推進されるような教育活動の企画や提案とその実施支援
- 3 プロジェクト推進・・・教育支援プロジェクトの運営管理・連絡・調整

●地域コーディネーターの役割（コーディネーションの概念図）

<全国体験活動ボランティア活動総合推進センターコーディネーター 橋本洋光氏>



地域学校協働活動における地域コーディネーターの実際

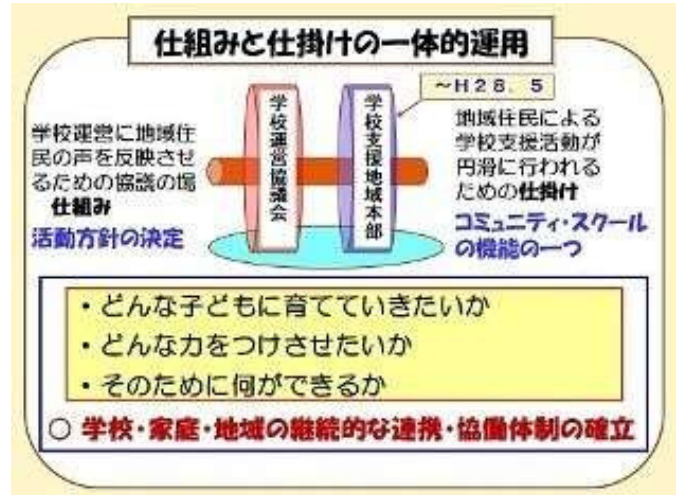
—北名古屋市地域学校協働本部での学校運営協議会との一体的取組を通して—

北名古屋市役所学校教育課 教育指導員 水田 就教
 北名古屋市役所生涯学習課 統括的な地域学校協働活動推進員
 河口 三知栄

1 はじめに

北名古屋市では、平成24年4月に「市民協働による学び支援推進事業」を基に、学校と家庭・地域の協働による学校の新しい仕組みづくりに踏み出しました。学校運営協議会と学校支援地域本部を「仕組み」と「活動の仕掛け」として位置づけ、両者の一体的運用を図り、コミュニティ・スクールの導入推進に取り組み、その後、平成28年6月には、学校支援地域本部を地域学校協働本部に発展させ、平成29年4月に市内全小中学校に学校運営協議会が設置されました。

学校運営協議会は、学校支援地域本部における「地域教育協議会」の実質的な場でもあり、目指す子ども像について協議し、個々の学校支援活動がその実践の場となり、現在では、地域学校協働本部が学校・家庭・地域住民・地域団体を巻き込んだ幅広い活動になっています。



2 市民協働による学び支援推進事業の概要

(1) 目的

市の施策「市民協働のまちづくり」を教育の分野において推進していくもので、目的は、「生きぬく力・学力の向上」であり、スローガンを「子どもの夢に向かって生きぬく力・学力をはぐくむ」としています。成し遂げていく取組を通して、家庭の「教育力」の向上、地域の「絆」の強化を目指します。

(2) 豊かな学び創造推進協議会

この事業により、地域全体で教育に取り組む体制づくりと地域の力を学校運営にいかす地域とともにある学校づくりを推進する組織が市の「豊かな学び創造推進協議会」です。下部組織として小中連携部会を置いて、教育指導員と統括的な地域学校協働活動推進員が事務局員として参加しています。

小中連携部会は、統括的な地域学校協働活動推進員（統括コーディネーター）が研修や情報交換に中心的な役割を果たし、地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）も参加し、情報交換や中学校区での支援活動について協議を行っています。



(3) 北名古屋市のコミュニティ・スクール

各学校では、学校運営協議会と地域学校協働本部が一体化してコミュニティ・スクールの活動が推進され、学校運営協議会は学校関係者評価委員会の場ともなっています。

市では地域学校協働活動推進員に、学校運営協議会委員を充て、地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）は、学校運営協議会の一員としてボランティアとの連絡、活動の調整にあたっています。地域連携部、環境安全部などの部会は、PTA組織とも連携がなされ、地域の方々と学校が目標とする目指す子どもの姿を共有し、年間活動計画により個々の支援活動が進められるようにしています。



3 地域学校協働活動の基盤整備

豊かな学び創造推進協議会では、文部科学省が示した「次世代の学校地域」創生プランに基づき、昨年度当初に従来の学校支援地域本部要綱の見直しを進め、市教委は5月に新たに地域学校協働本部要綱を告示しました。

その後、本年5月には、社会教育法の改正を受けて、一部改正しました。コーディネーターと表記していた字句を「統括的な地域学校協働活動推進員」、「地域学校協働活動推進員」としました。

また、今までの地域コーディネーターハンドブックをもとに、昨年8月に、新たに地域学校協働活動ガイドラインを作成するとともに、地域コーディネーターハンドブックを改訂しました。本年4月に文部科学省から、「地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン（参考の手引き）」が示されたので、見直しを進めていく予定です。

北名古屋地域学校協働本部要綱	
(事業)	第2条 協働本部は、北名古屋市豊かな学び創造推進協議会のもと、コミュニティ・スクールを充実し、強化を図る。
2	協働本部は、地域及び学校の特色又は実情を踏まえ、協働活動を円滑かつ効果的に推進する活動を行う。
(組織)	第4条 協働本部は、協働本部の目的に賛同し協働活動を行うことができる者により組織し、協働本部の本部門(以下「本部門」という。)は、学校運営協議会委員を充てる。
2	協働本部は、部会等の必要な組織を置くことができる。
(統括的な地域学校協働活動推進員)	第5条 統括的な地域学校協働活動推進員は、次に掲げる職務を行う。
(1)	複数の地域学校協働活動推進員との連絡調整及び地域
(2)	学校協働活動推進員間の情報共有に関すること。
(2)	地域学校協働活動推進員活動研修及びボランティアの養成に関すること。
(3)	協働活動の推進に関すること。
(地域学校協働活動推進員)	第6条 地域学校協働活動推進員は、次に掲げる職務を行う。
(1)	活動対象校の支援ニーズの把握及び支援活動に関すること。
(2)	地域住民及び学校との連絡調整に関すること。

コミュニティ・スクールの活動については、各校のホームページや便りなどを通して広報されていますが、市教委としても、市役所のホームページや「広報北名古屋」を通して、情報提供やボランティア募集、地域学校協働への参加の呼びかけを行っています。学校教育課の「コミュニティ・スクール」の項目では、それぞれの学校で行われた地域学校協働活動を写真と文で紹介し、市内全小中学校へつながるようにしてあります。

生涯学習課の「地域学校協働活動」の項目では、統括コーディネーターの企画による研修会や情報交換会の様子や各学校運営協議会に出向いたときに得た情報などを報告しています。また大学生ボランティアの募集チラシや登録申込書を掲載しています。

4 コーディネーター活動

北名古屋市では、学校ごとに配置された地域コーディネーターと生涯学習課に所属する統括コーディネーターが連携を取りながら活動しています。現在小学校全校と3中学校に総勢22名の地域コーディネーターが配置され、統括コーディネーターと協働して地域学校協働活動の実施に努めています。

(1) 統括コーディネーターの取組

- ① 統括コーディネーターは、それぞれの学校で行われる地域学校協働活動の場や学校運営協議会に出向いて、地域学校協働活動をサポートしたり、参考になる情報を伝えたりし、地域コーディネーターとの連携や活動内容の充実に努めています。また、地域コーディネーターからの相談にのることで、教職員やボランティアの要望にもできる限り応え、実現していくように進めています。
- ② 地域学校協働活動の計画を立案し、豊かな学び創造推進協議会の最後の全体会で次年度の計画を提案しています。

- ③ 地域コーディネーター情報交換会は、年3回程度開催し、生涯学習課から課長以下3名、学校教育課から教育指導員、市民活動推進課からも参加していただき、課を越えた連携もとりながら進めています。

情報交換会では、ボランティア活動についての率直な意見や提案、問題点などを協議する場としてとても有意義な会となっており、会を重ねるごとに自校のことだけではなく、中学校区では何ができるのか、地域や自治会と連携して活動していくにはどうしたらよいかなど話し合いに深まりや広がりがでてきました。さらに地域コーディネーター同士のネットワークが図られ、多様な活動への発展へとつながっています。

- ④ 読み聞かせボランティア研修会や図書整備ボランティア研修会を開催し、ボランティアとして活動するための必要な知識、心得を学ぶ研修会や情報交換を目的とした交流会を開催しています。



この研修会の内容、アンケート結果、交流会で話し合った意見や提案などを学校にも報告すること

ことで情報共有し、学校・ボランティア・行政が連携し、それぞれの立場でできることを考え、協力し合いながら活動がスムーズに進むよう取り組んでいます。

このように継続してボランティア研修会を行うことで、技量の向上や他校の活動の様子を知り、お互い刺激を受け合いながら、徐々にボランティア意識や関心の度合いが高まってきました。

- ⑤ 図書室見学及び図書整備ボランティアによる交流は、平成28年度は先進校の津島市立神守中学校の活動を視察させていただき、整備の実際や図書整備ボランティアの方々からアドバイスをいただきました。
- ⑥ 図書館員による本の補強指導は、ボランティアの要望に応じ、市の図書館で司書の方に指導していただいています。
- ⑦ 学生ボランティア募集は、放課後、子どもたちに宿題やわからないところを教えたり、実際の授業に入っの支援、部活動指導の補助などをする学生を募集しています。
- 市内の公共施設や大学の学生支援課を訪問し、募集ポスターの掲示、チラシの配布を依頼しています。大学生の希望と学校のニーズを調整し、事前に守秘義務や個人情報などの留意事項を説明した上で活動校に出向き、活動内容や活動時期などの話し合いの後、スタートさせています。
- ⑧ 市の広報誌やホームページを通じ、学校支援ボランティア及び学生ボランティア募集案内とともに、地域の人材を活かした職業人からそれぞれの仕事の内容ややりがい、努力してきたことなどを学ぶ職業講話の講師や職場体験先の募集も行っています。
- ⑨ 野外学習へのボーイスカウト派遣は、受け入れ学校数を限定し、市内のボーイスカウト団体との交渉にあたり、事前打合せや当日のボランティア活動にも参加しています。

(2) 地域コーディネーターの取組

- ① 五条小学校では4名の地域コーディネーターがそれぞれの活動の下準備をしたり、サポート活動のPRをしたり、学校の希望に合うサポート活動に協力していただける方を探したりしています。

また、保護者や地域の回覧板、掲示板を配布するコミュニティ・スクール便りの作成や毎学期末に行われる学校サポーター交流会を開催しています。以前は学校主導の会でしたが、今は地域コーディネーターが中心となり、当日の活動内容や役割分担、進行などを行っています。



② 師勝小学校では、図書ボランティアクラブ活動のコーディネートのほか、おやじクラブ、見守り隊の会議などにも参加して、広く交流する中でネットワークの拡大に努めています。PTAの一委員会活動であった花壇整備も保護者に呼びかけてのボランティアの活動に幅が広がりました。

③ 師勝南小学校は、3名の地域コーディネーターが低学年・中学年・高学年と担当を分けて、事前に学校側のニーズをつかみ、活動内容について学年の先生と打ち合わせを行い、ボランティア募集を行っています。

また、新たに学習支援活動を始める前に他校の実際の活動を見学したり、活動後の反省会にも参加したりし、交流にも努めています。

④ 鴨田小学校では、「鴨田っ子あいさつカード」を学校支援ボランティアと児童とのふれあいや関わりを深めるツールとして、児童が元気よくあいさつすることを励ます活動を提案し、実践をリードしています。

⑤ 栗島小学校では、地域との結びつきの強い方と学校支援ボランティアのリーダーが、地域コーディネーターとして活動しています。様々な地域学校協働活動にも参加することで、学校からの急な依頼にも対応しています。

また、事前の教頭先生との打ち合わせ、当日の役割分担やボランティアへの説明、事後の反省会の開催や取りまとめなど、さらに新たな活動にも積極的に取り組んでいます。

⑥ 師勝東小学校でも3名の地域コーディネーターが連携して、活動の連絡・調整にあたっています。

読み聞かせの打合せや反省会をしたり、地域コーディネーター自身が学校のホームページに定期的に活動記事をアップしたりしています。

この学校の地域学校協働活動の特色は、地域の市民活動団体「六ツ師協働隊」と連携・協働した活動です。地域コーディネーターが、夜間防災避難訓練活動のほか納涼祭や秋まつりについて、学校やお父さんの会、関係団体との打ち合わせや連絡調整・確認なども行っています。

また、前日の準備や買い出し、当日の活動にも参加し、学校、地域、保護者、PTAなどとの間にとってもよい関係が築かれています。



5 成果と今後の方向性

地域コーディネーターを中心に学校運営協議委員などボランティア活動関係者がそれぞれの立場や組織で、何をすべきか、何ができるかを考え、当事者意識をもって活動できるようになってきました。

地域学校協働活動の様子を見たり、一緒に活動に参加したり、交流したりすることにより、児童生徒は、体験の量と質を高めることができました。

地域と連携した行事の内容が充実し、児童生徒が地域の一員として参加することにより、地域への愛着心が高まるとともに地域の活性化が進みました。

熟議の充実を図り、子どもは地域で育てるという意識、地域で育てることは地域づくりの担い手を育てることにつながるという意識を高めることに努めることが大切です。

イコールパートナーシップにより子どもたちの学びや育ちを支援する体制を構築し、「地域とともにある学校」の充実につなげるようにしていきたいと考えます。

公民館を核とした学校支援地域本部の取組

地域の人財を 公民館・学校そして地域の応援団に！
～ “ひと” 育ち みんなで煌めく交竜の郷～

滋賀県竜王町公民館 館長 関川 雅之

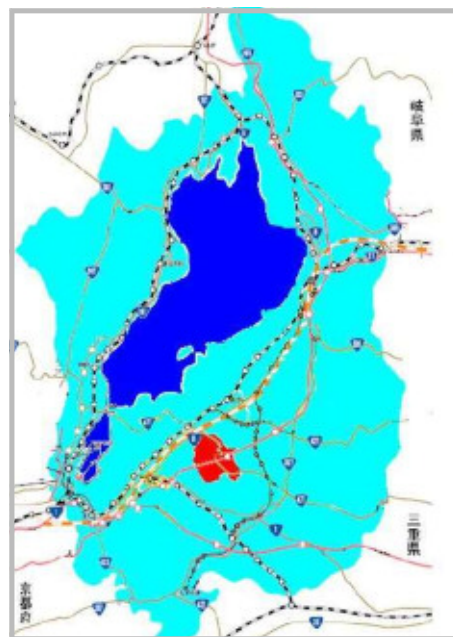
1 はじめに

滋賀県竜王町は、琵琶湖の南部に拓ける湖東平野の中央に位置しています。基幹産業は農業で、良質の「近江米」を産出しています。また果樹の栽培も盛んで年間を通して旬の味覚を楽しむことができます。さらに、「近江牛」の故郷として全国的なブランドへと発展しています。

歴史的には渡来文化伝承の地としても知られ、名残の地名（鏡、弓削、須恵、薬師、綾戸など）も存在しています。また、本町の北部を通過する中山道（現：国道8号）は、古くから東国と京の都を結ぶ屈指の街道としてあまたの武将や旅人が往来してきました。

工業面においては、南部丘陵地に大手自動車工場が立地し、県下最大の工場として町の活力源となっています。また、名神高速道路竜王IC近くには年間400万人が訪れる大型商業施設もあり、農、工、商がバランス良くそろった町です。

人口は約12,240人、世帯数約4,292です。（平成29年6月末現在）



2 竜王町学校支援地域本部の活動の目的

核家族化や価値観の多様化等、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化し、家庭や地域の教育力の低下が懸念される中、これからの子育てや教育は、学校（園）のみが役割と責任を負うのではなく、公民館の学びや人材・情報等を活用しつつ、学校支援のために学校（園）と地域人材をコーディネートしながら、学校・家庭・地域による総ぐるみでの学校支援体制を整えることと併せ、地域や家庭の教育力の向上を図ります。



定例会（月1回）

3 竜王町学校支援地域本部の概要

「学校支援地域本部事業」は、文部科学省が推進している事業で、学校（幼小中）が必要とする活動について、地域の方々をボランティアとして派遣し、学校・園を支援する取組みで、本町では「学校応援団」とも呼んでいます。平成22年度に開始しました。

町内には幼稚園2、小学校2、中学校1の計5校園（竜王幼稚園、竜王西幼稚園、竜王小学校、竜王西小学校、竜王中学校）があります。

竜王町公民館を拠点として、公民館長（社会教育主事）を筆頭に、統括マネージャー1名（常勤）と、コーディネーター5名で活動しています。コーディネーターは地域の状況に精通した人材を選んでいます。（元町職員・元町内幼稚園長、民生委員 等）

それぞれの役割としては、以下の通りです。

＜公民館長(社会教育主事)＞

学習支援全体の調整。

＜統括マネージャー＞

学校等との窓口。ボランティアとの連絡調整。

＜コーディネーター＞

学校等の要望に応じたボランティアの人選・発掘。

ボランティア活動時の補助。(助言・現場への同行)

他市町は本部を学校に設置していることが多いのですが、本町では公民館に設置しています。

そのメリットとして、

- ① ひとつづくりまちづくりの拠点である公民館（町内に1館）の中に学校支援地域本部を設置する事により、支援者は学校単位ではなく町全域となり支援分野が広範囲に及び、人材確保にスケールメリットが生きる事になります。また、様々な資格や経験を持つ人材との円滑な連携が可能となります。
- ② 統括マネージャーが全体の校園を把握しており、校園の取組に差が生じにくくなります。
- ③ 公民館長がパイプ役となり、公民館事業に参加している住民や自主活動グループに所属しているメンバーにボランティアとしての参加をお願いすることができます。
- ④ 公民館で学校支援にもつながる分野の講座を開催し、人材確保と人材養成を図ると共に、支援分野の拡大が可能となります。
- ⑤ 逆に、学校支援ボランティアが公民館事業への参加、自主活動グループへの参加につながります。

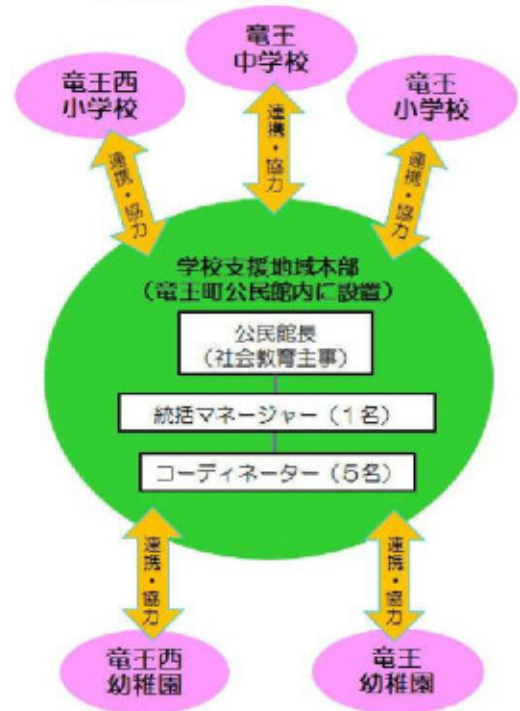
平成28年度はボランティアの実質支援人数は103名、ボランティアのべ人数は783名、支援回数は265回でした。ボランティア新規登録人数は35名でした。

平成22年度からのボランティア登録人数は、456名になりますが、今は活動されていない方も含みます。また、日程や内容等の都合で登録していても活動しておられない方もいます。

登録ボランティアは保護者ボランティアと地域ボランティアで構成されていますが、地域ボランティアのほとんどがシニア、高齢者であり、シニア世代の社会参加のきっかけづくりの場ともなっています。

なお、平成28年度の学校園からの依頼・支援回数は、竜王幼稚園84回、竜王西幼稚園10回、竜王小学校116回、竜王西小学校32回、竜王中学校24回の合計266回でした。

竜王町の学習支援体制



4 発足当初の取組

①支援ボランティアの皆さんの不安の解消

竜王町学校支援地域本部では、最初、春花壇、秋花壇づくりの支援を行ってきました。種

まき、苗植え、草刈り、夏場の水やりを含めての支援です。

これは発足当初、学校とボランティアの皆さんとの垣根をなくし、学校へ支援しやすい雰囲気づくりのために本部からの働きかけで行ってきた支援です。

支援本部は発足してから今年で8年目を迎え、今では学校とボランティアの皆さんとの垣根もなくなりました。本部からの働きかけで行った“花壇づくり”は、所期の目的が達成された平成25年度で終了しました。



②先生方の不安の解消

学校の先生方も、地域の方に授業に入ってもらって大丈夫かなあ。いやだなとの思いがありました。

そこで、協力いただける先生に、地域の方に入っていたいただいたほうが授業が楽しくなる、授業が活性化する、子どもたちも生き活きとする、ということのを他の先生に伝えてもらいました。

そして他の先生も理解いただき、回数を増やしていきました。

5 竜王町学校支援地域本部の活動内容

① 子どもたちが安全安心に通学できるスクールガード

この活動は、直接学校支援地域本部として関わっていませんが、学校への支援活動では大きなウェイトを占めています。

② 学習活動支援

家庭科の手縫い・ミシン、理科の実験

図工、音楽のピアノ演奏、合唱練習

社会科の昔の暮らし

地域社会見学説明・引率、戦争体験

クラブ活動指導

本の読み聞かせ、野菜の苗植え

おやつ作り、海外事情研修、たなばた飾り

稲作体験（田植え、稲刈り）

美術授業

など



③ 行事活動支援

スキー教室、託児（PTA総会・講演会、保育・授業参観）、焼き芋大会

餅つき、夏祭り、フェスティバル

など

④ 環境整備支援

花壇の整備（終了）、図書室の飾り付け（終了）

など

6 竜王町学校支援地域本部実施にあたって工夫している点

① 統括マネージャーとコーディネーター、そして公民館職員が月1回定例会を開催しています。このことにより、情報を共有することができ、また支援依頼内容を正確に伝えることができています。

② 地域から学校への支援にとどまらず、支援をお願いしたボランティアの方々を幼稚園や小学校の感謝祭（田植え、稲刈りで収穫のお米）や収穫祭（ボランティアの指導で育った大根炊き）に招待するなど、「学校から地域への交流活動」を行っています。

③ 幼稚園や小学校からお礼の絵や手紙が届きます。公民館に掲示すると同時に、ボランテ

ィアの方にも個別に送付します。そのことが次の活動の励みにもなります。

- ④ 年2回、全戸配布している「学校応援団だより」で支援の様子を伝えたり、ボランティアの募集を行っています。
- ⑤ 年間総支援回数が250回を超えており、連絡間違いや忘れを防止するため、学校園宛には、参加ボランティア氏名を、各個人宛には、内容や日時を記した案内通知を行いました。
- ⑥ 支援時には、統括マネージャーやコーディネーターが積極的に学校（園）へ行き、先生はもちろん、支援ボランティアと話し合いをしながら、今後につながる情報交換を行っています。
- ⑦ 登録者を得意分野別に整理した一覧表を作成し、依頼しやすいようにしています。
- ⑧ 支援内容の学校主担当者とボランティアの事前打合せをするようにしています。しかし、時間の確保に難しいところがあります。
- ⑨ これまでの経験、資料の蓄積により年間支援カリキュラムを作成し、その資料を学校に提供しています。
- ⑩ 統括マネージャー、コーディネーター、公民館職員の資質向上のため、県などが開催する研修会に参加しています。
- ⑪ 地域ボランティアの高齢化に伴い、次の世代へ移行することと、支援依頼が同一の人に集中しないように、広く地域ボランティアの人材確保をしています。

7 竜王町学校支援地域本部事業の成果

- ① 家庭では、なかなかできない体験や一人では難しいことでも、ボランティアの皆さんに丁寧でわかりやすく支援いただくことにより、子どもたちは達成したことが自信へと繋がったり、興味がなかったことでも興味を持ったり、今まで思いもよらなかった新しいことを発見したり等多くの体験ができました。
すべての学校支援活動は、今後子どもたちが大きく成長していくための“きっかけ”になっていると思います。
- ② 支援ボランティアの多くは、自分の「できること」を「できる時」に参加でき、子どもたちの笑顔と新たなやりがいが発見できて良かったという感想を持っています。
- ③ 学校支援地域本部と公民館の緊密な連携により、公民館教室に、学校が求める分野の講座を開設したり、支援に必要なステップアップ講座を取り入れることにより、さらなる人材確保と人材養成ができると共に、支援分野が広がってきました。

8 今後の課題

- ① 当町のシステムとして、学校支援地域本部統括マネージャーからコーディネーターへ、そしてコーディネーターから支援ボランティアへ支援要請の伝達や取りまとめを行っていますが、支援がいろいろな分野（内容）となることから、今後、学校園の支援科目ごとにリーダーを置き、きめ細やかな連携を図っていきたいと考えています。
- ② 平成26年度に、竜王小学校のコミュニティ・スクールが立ち上がり、その母体となった学校支援地域本部の働きは非常に大きい存在です。今後も「開かれた学校、地域の子は、地域で育てよう」を合い言葉に、地域と学校が連携・協議し、学校支援地域本部の活動を推進していきたいと考えています。
- ③ 幼稚園や小学校の保護者ボランティアが、子どもの卒園、卒業と同時に終了される場合が多いため、今後継続した活動をしていただくため、何か有効な対策をとっていきたいと思います。

地域全体で子どもたちを守り育てる ～30万人の市民を先生に～

地域学校協働活動 これまでの10年 これからの10年

奈良市教育委員会事務局 学校教育部地域教育課 地域学校連携推進員
元富雄中学校地域教育協議会 総合コーディネーター 太田 淳子

1 はじめに

奈良市は、奈良県の北端に位置しています。奈良県庁所在地であり、中心市街地に8つのユネスコ世界遺産が点在する町です。東大寺・興福寺五重塔・元興寺・春日大社・薬師寺・唐招提寺・春日山原生林・平城宮跡。

また県庁前には人と鹿が共存する広大な奈良公園もあります。学校園は大阪に近い北西部と中心市街地に集中し、東部は緑豊かな山林や茶畑など、農業が主産業です。本市はこのように国際文化観光都市としての性格を備える一方、京阪神のベッドタウンとして市西部や北部に近代的な住宅団地が次々と建設され、人口は急激に増加しました。平成14年4月1日には中核市に移行。さらに、平成17年4月1日には月ヶ瀬村、都祁村と合併し、面積276.84k㎡、人口37.3万人となり、平成27年4月1日現在、人口36.3万人となっています。（「平成27年度 市政概要」より）

このような環境の中、子どもたちは、幼稚園・こども園から中学校まで世界遺産学習をします。「奈良が大好きで、奈良で生まれて、暮らして、よかった」と思える子どもたちを育てています。



2 奈良市の地域教育推進体制（地域学校協働活動と放課後子ども教室推進事業）

目的

本市では、すべての中学校区で地域学校協働活動（平成20年「学校支援地域本部事業」、現在は「地域で決める学校予算事業」という名称）とすべての小学校で放課後子供教室推進事業を実施しています。この2つを「奈良市地域教育推進体制」として推進しています。

2つの事業は、奈良市における教育の指針「奈良市教育大綱（平成26年策定）」を踏まえた「奈良市教育振興基本計画（平成28年策定）」を基にしています。本市は「21世紀

の社会をたくましく生き抜く人材の育成」や奈良市教育振興基本計画 基本方針5 市民と協働した教育を進める「30万人の市民を先生に」を実現するため努力しています。

概要

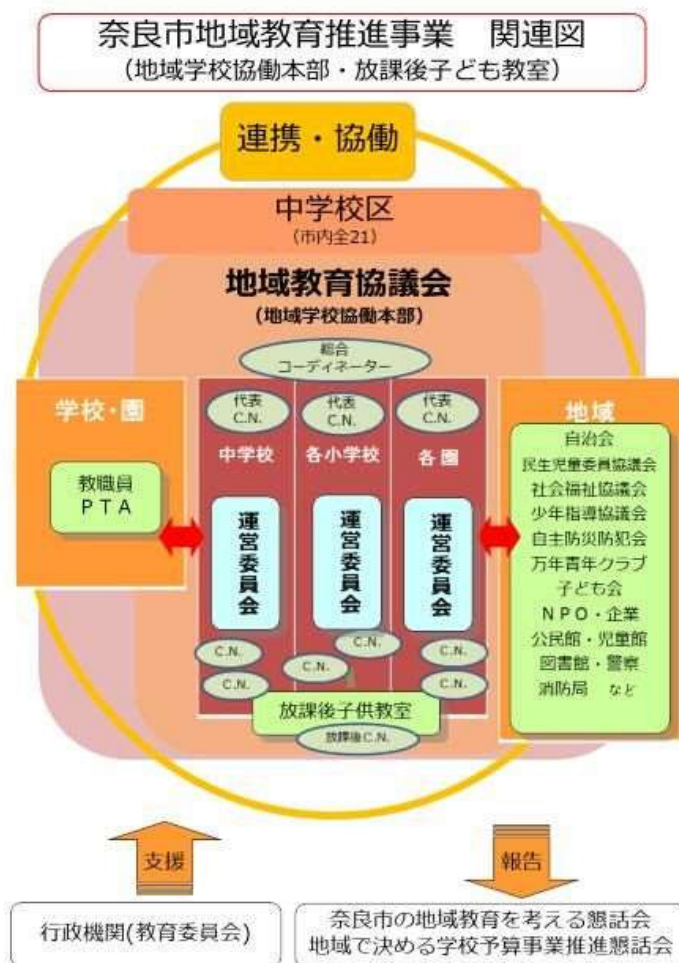
関連図は右のとおりです。中学校区を単位として地域教育協議会が、各学校園には運営委員会が組織されています。

放課後子ども教室は小学校運営委員会に委託しています。

地域教育協議会には、総合コーディネーターが、各運営委員会には代表コーディネーターが各1名設置され、地域コーディネーターがそれぞれ複数名います。

奈良市の地域コーディネーターとは、「学校と地域をつなぎ、奈良市地域教育推進事業の中心になって活動する」方々です。

学校園の周辺から校舎内に、そして教室内に地域のマンパワーが注ぎ込まれ、子どもたちの豊かな学びになっています。同時に「地域コミュニティの活性化」も目指します。



3 富雄中学校の事例にみる地域で決める学校予算事業

(初代総合コーディネーター太田文貴)

平成20年度より奈良市ではすべての中学校区で「学校支援本部事業」を立ち上げました。

① 設立前

当時、PTA会長であった私は、中学校長から依頼され、富雄中学校区学校支援本部「総合コーディネーター」に就任。

② 1年目

学校支援地域本部メンバーと会議を重ね、どのような取組を実践するか試行錯誤、地域の方々や教職員に理解していただくのが難しかった時代です。しかし、PTA活

動で培った教職員との信頼関係や地域とのネットワークを生かし、「地域と学校のかげ橋となる」と決めました。

✎小学校では、地域の方々が子どもたちを守り育てる仕組みがありましたが、中学校の門は閉ざされていました。また地域の方々も中学生や中学校に対し、苦情を言うことはあっても、生徒や学校への理解や支援は少なかったようです。

③ 2年目

奈良市が主催する「コーディネーター研修」で学び、OJT※を行いながら、地域の方々や他中学校区のコーディネーターとのネットワークを拓けました。学校園に理解ある仲間をコーディネーターとしてスカウトし、学校の「かゆいところに手が届く」支援を始めました。（中学生への放課後学習や部活動巡回）

✎教育課程の各教科や単元で、先生方が「生きる力」や「基礎学力」をつけることはできますが「社会とつながらなければ得られない力」を目指します。



④ 3年、4年目（平成22年度と23年度）

文部科学省単年度委託事業「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究を奈良市が受託し、富雄中学校と他2校が委託を受けました。

（地域の学区ブランドを考案、コーディネーターと児童生徒が開発・発表しました）

✎学校教職員の理解と委託金がなければ、不可能であったプロジェクトです。

22年度：富雄中学校区の鳥見小学校が地域生産の古代米を商品化・広報する取組

23年度：富雄中学校の生徒が古代米を使用したごま団子「富より団子」を考案、製造会社に製作を依頼（現在は生徒の部活動「ボランティア部」が継承し広報しています）

⑤ 5年目以降

④のプロジェクトを通し、研鑽を積んだコーディネーターが学校と協働しながら、中学校区の子どもたちに様々な取組を実施しています。「変化する社会を生き抜く力」を目指します。



- ・ 学習支援（数学基礎講座・テスト前学習・数学チャレンジ講座）
- ・ キャリア教育支援（教職員と情報交換・入試面接指導・ゲストティーチャー授業・職場体験後の発表ポスターセッション）
- ・ 環境整備（『花咲きロード学校前の植込み100mの花を』『クリーンキャンペーン校区内を児童生徒と地域人材が清掃』『スッキリ大作戦学期末大掃除』『トイレ掃除に学ぶ会』）

4 奈良市の放課後子ども教室推進事業

奈良市ではすべての小学校の敷地内で放課後子ども教室と放課後児童クラブを実施しています。

放課後子ども総合プランの一体型であると云えます。

目的

子どもたちの安心安全な居場所と心豊かな環境づくり

5 奈良市の地域学校連携・協働の特徴

すべての市立幼稚園・こども園・小学校・中学校で実施している

中学校区単位で、地域人材が取り組み、事業予算も確保、使い方を決定している

地域教育協議会で、ふさわしい人材をコーディネーターとして発掘。育成している

✎この特徴が、奈良市地域教育推進事業を10年間で発展させたと考えています。
(取組の事例)

●教職員と地域人材との合同研修

コーディネーターが地域学校協働活動について新着教職員に講義します



●授業支援

家庭科や理科などの実習・実験にはコーディネーターが教員と相談し、ボランティアを集めて実施します



●夏休み連続3日間 鬼ごっこ大会

小・中学生と地域人材・教職員全員集合

放課後子ども教室に中学生をリーダーとして招聘し実施しました。小中コーディネーターの連携で実現しました

(低学年の日・中学年の日・高学年の日)